福岡市環境審議会循環型社会構築部会議事録

１　日　時　令和３年 10 月 29 日（金）15：00～16：00

２　場　所　　福岡市役所北別館５階　会議室（Web 会議）
（福岡市中央区天神１丁目 10 番１号）

３　出席者（敬称略）

・福岡市環境審議会委員

	氏　名	役　職　等
部会長	松 藤　康 司	福岡大学 名誉教授
	阿部　真之助	市議会議員
	大 森　一 馬	市議会議員
	小 出　秀 雄	西南学院大学 経済学部 教授
	平　　由以子	特定非営利活動法人 循環生活研究所 理事
	中 山　裕 文	九州大学大学院 工学研究院 准教授
	久留　百合子	（株）ビスネット　代表取締役／消費生活アドバイザー
	松 野　　隆	市議会議員

４　会議次第

１　開　会

２　議　事

ごみ減量施策の実施状況等について

３　閉　会

５　議事録

【事務局】

（資料１について説明）

【部会長】

ありがとうございました。事務局の方から報告がありましたとおり、コロナ渦におけるごみ減量施策の動向ですので、これまでと若干違うと思いますが、ごみ処理量が大きく減少しているという結果がこの１、２年は出ています。

これが今後もずっと続くのかどうかということが重要ですが、このあたりを踏まえまして、ただ今の報告の内容についてご質問やアドバイス、コメントがあればよろしくお願いいたします。

【委員】
まず、家庭ごみの処理量の推移について、コロナの影響があってかなり増えているということですが、そもそも家庭ごみは高止まりで推移しており、今後、コロナは置いておいても、この家庭ごみの処理量をどう減らしていくかという点についてはしっかり取り組んでいただきたい課題だと思っておりますので、今後の取組みについてお聞きしたいというのが１点。
それから、プラスチックごみについても是非減らしていただきたいのですが、再生利用については色々とこれから取り組みが進むのだろうと思いますけれども、例えば海辺に散乱しているプラスチックというのは、回収されなかったプラスチックだろうと思うのですね。そのプラスチックはどこから海に来ているのか。例えば、福岡市内の河川から海に流れているプラスチックは全体に対してどのくらいの量なのか、というような調査はされているのか。そのあたりのことが分かればお聞かせいただきたいと思います。

【事務局】
ありがとうございます。
１点目の家庭ごみの減量を今後どのように取り組んでいくのかというところでございますが、新しいごみ処理基本計画の中でも、家庭ごみの組成に占める割合の多くが古紙、食品廃棄物、プラスチックごみとなっておりますので、その３品目を重点３品目として取り組んでまいりたいと思っております。
古紙につきましては、現状で行っております地域集団回収を主体とした地域活動による古紙の回収、資源物回収拠点での古紙の回収を特に進めてまいりたいと思っておりますし、特に資源化可能な古紙の多くを占める雑がみについて、しっかりと周知啓発をして回収を進めてまいりたいと思います。
食品廃棄物につきましては、食品ロスの削減ということでフードドライブやフードバンク活動の推進等を行っておりますし、生ごみリサイクル推進事業にもしっかり取り組んでまいりたいと考えております。
プラスチックごみにつきましては、今後、効率的な回収や、資源化も含め考えていきますが、一番大事なのは発生抑制だというふうに認識しておりますので、そちらのほうの推進を進めてまいりたいと考えております。
海辺で散乱しているプラスチックで、河川からどのくらいの量が流れ込んできているのかということにつきましては、具体的な数字を持っているわけではございませんが、基本的にはほとんどが河川から流れてくるものと考えております。河川ごみの分布の調査などを一部の河川では実施しておりまして、そちらのデータ等を踏まえながら、今後どのように河川からの流入を減らしていくかというところを検討してまいりたいと考えております。

【委員】
要望ですが、生ごみ対策と海辺に流れ着く前に河川でプラスチックごみをどう回収していくかということを、是非、力を入れて今後検討していただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

【部会長】
どうもありがとうございました。
少しデータが古いですが、以前アイランドシティ建設のときに、多々良川流域の調査をずっとやっていましたので、港湾空港局に過去のデータがあるかもしれないですね。
それから、樋井川は福大のグループが月に１度河川清掃とかをやっておりますので、精度があまり高くないのですけれども、どれくらい発生しているのかというのはある程度データを掴めるのではないかと思います。そのあたりを少し参考にしながら、特に大雨のときにどっと流れてくるというのが福岡の都市河川の特徴ですので、そのあたりをまとめれば、ある程度予測がつくのかなと思っています。

【委員】
２点あります。１点目は２ページになりますけれども、リサイクル量とリサイクル率の推移というところで、これはコロナの影響で集団回収ができなかったとか色々な要因はあると思うのですが、コロナがある程度落ち着いてみないと分からないとはいいながらも、今、脱炭素化とか持続可能とか、そういう関心が非常に高まってきているのに、リサイクルがあまり進んでいないように見受けられるのですよね。要因がコロナということがあるのかもしれないですけれども、やっぱりもうちょっと増えてもいいのではないかという気がします。
コロナが落ち着いてからがいいかもしれませんけれども、そういうところをもう少し分析されて、リサイクルを進めていくにはどうしたらいいのかというところをもう少し検討されたほうがいいかと思います。
それと関連して、プラスチックごみの問題ですけれども、ここについてはもちろん国の来年の４月に出てくる政省令を見てからということはあるかと思いますが、実際に「出しにくい」とか「どういうものを出したらいいか分からない」とか色んな市民の声が出ているということを含めて、それから先ほど事務局がおっしゃっていた発生抑制というところを考えてみても、市のほうでもお考えがあるのかもしれませんが、例えば事業者と消費者とか市民、行政、それから大学でそういうことをやってらっしゃるところがあれば大学の方も入れて、何か協議会みたいなものを作られて、実際に生活していく中でプラスチックごみをどうやったら減らせるのかとか、市民への意識啓発をどうしたらいいのかということを、こういう委員会とか行政からでもいいんですけれども、私はやっぱり実質的に関わっている方たちが議論をして出してこられるほうがいいのではないかなというふうに思うのです。
ですから、そのお考えがあるのかどうかということと、来年あたりでそのあたりのことが検討できるかどうかということをお尋ねしたいと思います。

【事務局】
まず、１つめのリサイクルが進んでいないというところですが、近年は確かにリサイクル量をみるとほぼ増加しておらず、横ばいで推移しております。
本市のリサイクル量の多くを古紙が占めております。古紙に関していうと、リサイク

ルが進んでいない要因で一番大きいのは雑がみの認識によるものだと思います。雑がみが本当にリサイクルできるか分からないという方も結構おられますし、どうやって出したらいいのかが分からないというところもあります。そういったところにはしっかり注力していく必要があるだろうと考えます。

あとは、出しやすいとか、学生さんとかは集団回収をやっているかどうかも分からないという声もよく聞きますので、単身者や学生に向けた出しやすい場所に回収ボックスを置くなど、そういったところもしっかり取り組んでいく必要があると感じております。

それから、プラスチックごみに関しまして、協議会などでやってはどうかというご提案だと思います。実際のところ、事業者が主体となって自主回収したり、消費者からいわせればプラ製品を選択できない、減らそうと思っても売られているものを買うという流れの中で減らすことがなかなか難しいという中で、当然、製造・設計段階から色んな工夫があってしかるべき状況になっていますので、新しい法律のポイントの中でもそういったところには触れられています。

事業者が一番自分たちの作っているプラスチック製品の性質を理解されていますから、その中で自主回収をしてリサイクルにつなげていくという制度も今回の法律の中では謳われておりますので、そういった事業者、消費者をつなげる市や大学、学校も含めて連携が必要ということは認識しております。それが協議会という形で来年度立ち上げられるかというところはまだ何ともご回答することはできないのですけれども、当然、連携が必要だと考えておりますので、そこはしっかり取り組んでいきたいと思っております。

【委員】

ありがとうございます。

プラスチックについては、確かに私たちも買い物をするときに「プラスチックを買いたくないのに」と思っても選択のしようがない。法律でこれから規制されるのかもしれませんけれども、そういうところを消費者が事業者にどんどん言っていかないといけないと思うのですよね。ですから、そういう意味での協議会というか議論の場というのがあればいいと思いましたので、検討できるようであればお願いします。

最初のほうでは雑がみのお話がありましたが、私も実は市から雑がみ入れをもらったのですよ。それまでは雑がみは縛ったり、とても手間がかかって面倒臭かったのですけど、袋をいただいて、そこにどんどん封筒とか小さい紙とかパンフレットとかも入れて出せるっていうのはものすごく楽だったのですよね。

そういうふうにして、最後にいわれたように、もちろん場所もそうですけれども、出しやすいような形を行政の方から推進していただくというか指導していただくと、もっともっと進むのではないかと思います。

【部会長】

以前、軽包装キャンペーンというのを優良企業とかデパートなどでやっていたのですが、シールを貼って軽包装にするというのは、以前に比べると住民の反応もよくなってるのではないか。10 年前は買い物袋などでもサービスが悪いと言われるということがあ

ったのですが、今は逆にそれが当たり前になってきていますので、あの頃に比べるとずいぶん変わってきているのではないかと思います。

もう１点は、今、天神ビッグバンでいろんなオフィスの建替えがあっていて、あそこにテナントがいっぱい入りますよね。あそこに対して大店法と同じような形で、ごみ減量施策を条例か何かで少し検討させるようなことは、できないですかね。議員立法か何かで。非常に有用かと思うのですが、何かアイデアはありませんか。

【委員】

議員立法というか、今度できたビジネスセンターは、いわゆる感染症対策もやっているビルなので、当然のごとくそういう環境に優しいこともやってくれるだろうと私達は思っていますが。もしされない場合には、議員立法ないし環境局に働きかけてそういう対策をやってほしいということはいえると思います。

【部会長】

ぜひやってほしいと思います。

【委員】

わかりました。

【委員】

２点あるのですけれども、まず、ごみの組成の件です。ごみの量と組成について非常に細かく報告していただいて状況がよくわかりました。ありがとうございます。量については基本的にはすべて全量計測されているので割と正確なデータが出ていると思うのですが、ごみの組成のデータについては、基本的には年に４回以上の組成調査を行って、その比率を全体量に掛けて求めていると思うのですよね。そうすると、ごみ組成はたまたま調査したときの状況によって結構値がぶれるというのは昔から指摘されていまして、この５ページのデータは、例えば赤いところは増加傾向にあると書かれているんですが、１％とか２％の変化でこれはおそらくいえないと思いますね。ばらつきによる誤差が非常に大きいので、２割、３割減っているとそれはおそらく減っているのだろうと思うのですけど、数％ではこういう結論を出すのはもう少し慎重になったほうがいいかなというふうに私は思います。

もう一つ、プラスチックのリサイクルにつきましては、これはなかなか各自治体も苦慮されているところかと思いますし、特に燃えるごみに含まれているプラスチックのうち６割以上が容器包装みたいなデータがあったと思います。こういう容器包装プラスチックはいろんな素材が複合的に使われていて、同じ一つの製品でもポリエチレンとポリスチレンとかポリプロピレンが混ざったりしているので、マテリアルリサイクルはなかなか難しいとか、そもそも何で作られているかが分からないとか、そういうプラスチックの種類というのがすごくリサイクルのネックになっているので、今日の報告ではプラスチックの汚れを中心に報告いただいたのですけど、素材についても考慮されたほうがいいのではないかと思います。

現状ではなかなか素材を分けてマテリアルリサイクルするというのは難しいので、先ほど九州に３つのリサイクルプラントがあるというデータがあったと思いますが、そのうち２つはケミカルリサイクルだと思います。材料リサイクルをしようと思ったら素材を分けないといけないので、そこをどうやっていくかっていうのはごみを集めた後だけじゃなくて、本当は事業者・製造者のほうが、見分けがつきやすいとか単一の素材を作ってもらうとかそういうふうにやっていかないと、なかなか福岡市だけでプラスチックのリサイクルを合理的に進めて行くのは難しい現状にあるなという感じは受けました。

【事務局】

組成の件、ありがとうございます。確かに限られた回数の中で組成分析をしておりますので当然ばらつきという要素はあると思います。もう少しデータを積み上げた中で、どういう風な分析をしていくかというのは今後の検討課題とさせていただければと思います。

プラごみに関してはおっしゃるとおりで、容器包装プラはどうしても複合素材が多くなってしまうということ、それがリサイクルの支障になっていることは理解しております。ただ、そこを理由に回収を選定していくといったところはなかなか市民に対しての周知は難しいというところもあります。

もうひとつ、製造業者の観点、製造・生産の段階から配慮してくことが必要であるということも確かにそのとおりだと思いますし、今回の法律の中でも環境配慮設計みたいなところに該当するというふうには考えております。なので、そういったところの事業者に関しましても今後協議させていただいて、どういう方向性で進めていくのかということはじっくり検討していきたいと思います。

【部会長】

どうもありがとうございます。

最後の問題はプラスチック循環利用協会などにはかなり中央政府から指示がいっていて、今後容器包装の素材をどういうふうに変えていくかとか、そういうことに動き出していますので、少し情報を共有されたらいかがでしょうか。

いずれにしても、容器包装は複雑ですので、それを集めたからといって、すぐリサイクルとか再生利用というのは難しいと思うのですよね。そういう面で、もっと上流のほうからということは中山先生のおっしゃるとおりだろうと思います。

【委員】

報告ありがとうございます。

レジ袋が３０％ほど減ってきたということで、すごく効果があったと思っているところです。一方で、食品残渣のほうですね、7 ページから８ページのところで、こちらのほうで食品ロスの削減の施策がフードドライブとか SNS のデザインですっていうことしか出てなくて非常に残念だったということと、これでいいのかということをお尋ねしたいと思っています。

８月９日に IPCC の結果が発表されて、二酸化炭素を人間活動で排出していい量が、

あと６年くらいで限界がくるというふうになっています。この 50 年の人間活動で地球温暖化にさせたということがはっきりしたということ、10 万年、±１度で安定していた気温がこの 50 年で２度も動いているということ、色々な数字が生命の限界のすぐそこまできていて、この５年でどう取り組むかで地球の寿命が決まるということがはっきりしているというわけなのです。

その中で低炭素ということがいわれていると思うのですけれども、やはり有機物を土に戻していかないと土が痩せて砂漠化して CO2 が地面から出ていくということを考えると、やはり食品ロスの削減はフードドライブとかだけではできなくて、堆肥化していくことをもっと出していかないと、もう本当にどう啓発するかというよりも、どう行動するかというところを問われているので、もう間に合わないのではないかというふうにすごく焦っています。

レジ袋を断るというのが誰でも今日からできるということで、それでも長年かけて 30%削減するというのは非常に難しかったと思うのですよね。それを考えると、有機物を土に戻していって地域の中で循環させるという行動はもっとハードルがあるので、やはり色々な面から協力していかないと具現化できないところなのです。それほどハードルはあるのですが、効果もすごくあって、それはレジ袋ももちろん捨てるときにいらなくなるからもっと減らすことができるということと、コンポストをした人にアンケートを取ると 23%の人が食品ロス削減の行動を新たに始めるという結果も私たちのほうで出しています。

IPCC の地球の診断書の結果は世界中に大きな影響を与えていて、グレートリセットといわれて企業が急速に動き始めているのですよね。世界に比べると日本は非常に遅いと思っているですが、それでも私のところには日本中の企業から生ごみを堆肥化して土に戻す行動をやりたいということでどんどん連絡がきています。実際に、循環生活研究所のほうでも、この１年間で福岡市内の 1500 世帯以上の方がコンポストを初めてスタートされているのですね。その数字を見るとやはり市民のニーズ、動きと、福岡市の出している施策が合っていないという感じをものすごく感じるのです。それは、やはり全国からの人と話したり、色々な企業の SDGs や最先端の方々と日々話しているからこそ、ものすごく大きな違和感をもっています。

例えば SDGs でいうと 12 番のところで「2030 年までに、人々があらゆる場所において、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つ」ことが大事だということが出ているのですが、色んな情報を与えていろんな行動を促進するというところでは、やはり食品の項目での情報発信や取り組みが福岡市のほうはかなり遅れていると感じていますので、やはりコンポストのところをもっと前に進めていってほしいというふうに思っております。

【部会長】

ありがとうございます。熱烈なメッセージを送っていただいておりますので、事務局はそのあたりを十分考慮されて、少し施策に活かしてほしいということだろうと思います。

【委員】
14ページでプラスチック容器包装のリサイクル事業者が九州で３つしかないと。１つは昔、学生と見に行ったことがありますけど、こんなに少ないのですか。

【事務局】
この３社というのはプラスチック製の容器包装のリサイクル業者で、容器包装リサイクル協会に登録されている３社です。ペットボトルを対象としている事業者は他におりますが、プラスチック製容器包装については登録がないということで、この３社としております。

【部会長】
ご存じのとおり、ついこの間までは、中国にこのプラスチック類は輸出していたわけです。２年くらい前にノーといわれたので慌てているわけですが、それまでは、中国に輸出したものも日本ではリサイクルにカウントしていたのですね。その点がありましたので、中国がノーといった途端に全国で困っているわけです。ということで、やっと業界も取り組み始めていますので、もう少しこのあたりは九州でも増えてくるのではないかと思います。

先日、新しいごみ処理基本計画を出したのですけれども、先ほど委員も言ったような脱炭素だとかSDGsだとか、今、非常に各マスコミも取り上げていますが、そういうキーワードがあまり入っていないという印象はありますね。

【委員】
先ほどの委員のご発言には、我々議員も賛同するところはたくさんあるのです。
しかしながら、福岡市の置かれている状況が、共同住宅やマンションとかに住んである方が約7割から8割の人口になっているわけです。そこにコンポストのシステムを導入するのには様々な地域の問題点があって、やっぱり導入するためには市民の理解が必要ですが、先ほど松藤先生が言われたようにSDGsの観点とか様々な問題点が盛り込まれていない。実際、我々議員も一市民として、この資料を見て内容的に理解が深まらない部分というのが市民の中にあるのじゃないかと。それを伝えていくのが議員の仕事なのかもしれないですけど、そういったことも含めて、もっと環境局に力を入れていただきたいという部分が議会の中でも様々意見が出ていて、古紙のリサイクルは事業系古紙の回収を始めてリサイクルベースもでき上がったわけですし、プラスチックと特に食品ロスというのは全世界の問題点だと思うので、そのあたりは市民の方にもっと啓発をして理解を深めていく努力を、ただ単なる実施とか施策の中だけでなくて、小学校だとかそういった地域の公民館の事業とか様々なところに活かしていただきたいというのが我々議員の願いじゃないかと思っています。

【部会長】
環境月間とか、ちょっとこの２年間はコロナであまりPRできていませんけれども、

ああいうものを含めて多くの人たちに参画していただいて、今度はその人たちにプロモーターとして動いていただくという形をやるのも一つかなと。

それからコンポストの場合は、作るのはいいのですが、それを使うところの問題はあります。１次産業との連携というのも、福岡の場合は都市化が進んでおりますので、やっぱり農水関係の連携もかなり重要なところではないかという気がしております。

たまたまここ一年はコロナ渦ということで、データの中でいつもと違う結果が出ておりますので、これがほんとにスローライフの中で出てきているのか、たまたまコロナという普通と違う状況の中での一時的なものかということは、見極める必要があるのではないかというのが印象です。

いずれにしても、これ以上悪化させるというのは地球全体の問題でもありますし、COP26 がもうすぐありますので、そのときにまた色々と問題提起されると思いますし、温暖化で間違いなく地球が瀕死の状態になっていると。今回ノーベル賞にもなったわけですから、それも踏まえて、さらにこの施策を目に見える形で実施していただきたいというふうに思います。

それでは、他に無いようであれば今日の議事はこれで終わりたいと思います。

なお、11 月 15 日に予定されております環境審議会総会において、この概要をまた報告させていただく予定ですので、よろしくお願いいたします。

それでは事務局にお返しします。

【事務局】

部会長、部会員の皆さまありがとうございました。

以上を持ちまして、本日の環境審議会循環型社会構築部会を終了いたします。

本日は誠にありがとうございました。